

満洲文字の文字表をめぐって(4)
—母音調和、*ɑ*の解釈、子音と母音の組合せ—

吉池孝一 中村雅之

はじめに

中村：今回は17世紀前半の書写資料と想定し得る「満文原檔」のモンゴル文字と満洲文字の文字表を利用して、語の位置による字形の異なりのうち、*a*, *e*の末位形、*i*の中位形・独立形を検討しました。今回は、*ɑ*の字形を検討しようということでしたね。そのために先ず母音調和の問題を確認する必要があります。

吉池：どのような手順で進めましょうか。

中村：まず母音調和自体についてどのような現象であるか確認し、次いで有圈点の満洲語文語（以下、有圈点新満文と呼ぶ）の母音調和を検討します。最後に文字表の子音文字と母音文字の組み合わせを確認しましょう。

母音調和

中村：母音調和は、単語内の母音や、単語の母音と接辞の母音の間に一定の制限がかかる現象で、このような母音調和を有する言語は世界に広く存在しているようです¹。制限のかかり方も様々です²。

吉池：我々が実感をもって語れるのはアルタイ諸語の一部です。アルタイ諸語では、単語などの一定の音の単位は、同類の母音より構成され、別の類と互いに混じることがありません。同類の母音は男性母音（＝陽性母音）と女性母音（＝陰性母音）に分けられ単語などの中で共存しません。言語によっては中性母音と呼ばれるものがあり、男性母音とも女性母音とも共存します。

中村：確認のため、いくつか実例を見ておきましょうか。

¹ 斎藤純男(2015)「母音調和」『明解言語学辞典』三省堂、斎藤純男・田口善久・西村義樹編。「トルコ語やモンゴル語などのアルタイ諸語、ハンガリー語やフィンランド語などのウラル諸語、アカン語やイボ語などのニジェール・コンゴ諸語など、広い地域に見られる。」206頁。

² 亀井孝・河野六郎・千野栄一(1996)「母音調和」『言語学大辞典第6巻術語編』三省堂。「母音調和には、その関与する特徴によって、1)前舌対後舌、2)円唇対非円唇、3)ATR対非ATR【Advanced Tongue Root. 母音の発音の際に舌根が前に移動するか否か：対談者注】、4)高対低【舌位の高と低：対談者注】、の4つのタイプがある。」1263頁。

現代トルコ語

吉池：これは現代トルコ語の例です³。簡易な音声記号で示します。

ファトマ こうえん で うつくしい 一 むすめ みる た
fatma park/ta gyzel bir kiz gær/dy

ファトマ パルクタ ギュゼル ビル クズ ギョルトユ

ファトマは公園で美しい（一人の）娘を見た。

中村：fatma や parkta は男性母音 a からなる単語で、gyzel は女性母音 y, e からなる単語。Gærdy の æ は女性母音で、それに付された接辞 dy の y も女性母音ですね。

吉池：男性母音 a, i, u, o のグループと、女性母音 e, i, y, æ のグループがあります。中性母音はありません。トルコ語はローマ字表記されます。ローマ字と音声との対応をみると、男性母音は a[a], i[i], u[u], o[o]、女性母音は e[ɛ], i[i], ü[y], ö[œ] となり、男性母音の舌の位置は後寄り、女性母音の舌の位置は前寄りです。ほぼ舌位（舌の位置）の前後で類をなしています。

現代モンゴル語

吉池：これは現代モンゴル語（ハルハ方言）の例です⁴。簡易な音声記号で示します。

わたし これ ほん を よむ た
bi: en nom/i:g onf/la:

ビー エン ノミグ オンジャー

私はこの本を読んだ。

中村：onf/la: の o は男性母音で、これに付された接辞 la: の a も男性母音。この語に接辞 le: (e は女性母音) を付して onfle: とはしないということですね。

吉池：一般的な音素表記と音声の対応をみると、男性母音は a[a], o[o], u[u]、女性母音は e[e], ü[u], ö[œ]、中性母音 i[i] となります。城生伯太郎(1976)は、舌位の前後の対立でも、広狭の対立でもなく、diagonal harmony であるとしします⁵。前狭と後広の対立ということな

³ 勝田茂(1986)『トルコ語文法読本』大学書林の第5版(1996)による。

⁴ モンゴル国立大学モンゴル語研究室編、岡田和行編訳(1989)『モンゴル語教科書』東京外国語大学発行による。

⁵ 城生伯太郎(1976)「モンゴル語の母音調和」『月刊言語6 特集・母音調和をさぐる』大修館書店、53-61頁。「各音素記号と国際音声字母との概略的な対応を示せば、/ä/=[e]、/a/=[a]、/ü/=[y]、/u/=[o]、/ö/=[œ]、/o/=[ɔ] 【e, a は後ろ寄り、y は前寄り：対談者注】となり、音声学的見地からは、これらを単なる前舌母音音素群と奥舌母音音素群との対立と見なすことには疑問がある。日本の学者の中でも例えば服部四郎氏などは、この調和に関して「狭母音と広母音との対立から成っており、前舌母音と奥舌母音との対立から成るのでは

のでしょうが、私の感想を言えば、話し手がそのような複雑な区別の習慣を持っていたかどうか疑問です。話し手にとって口腔の広狭が主要な区別で、舌位の前後は付随的なものではないかという気がします。

有圈点新満文

中村：過去の言語である有圈点新満文の例はどうでしょう。

吉池：これは『滿漢字清文啓蒙』（1730年序）中の一文です⁶。有圈点新満文です。例は音声記号ではなく満洲文字のメレンドルフ式翻字で示します。なお津曲敏郎(2002)⁷は、男性母音 a, o, ũ、女性母音 e、中性母音 i, u とします。

ゆえなく ぜに を だます 受身 へして もっていく 受身 た
baibi jiha be eitere/bu/fi gama/bu/ha
バ化⁶ ジハ⁶ ヘ⁶ エテレブ⁶フィ⁶ ガマブ⁶ハ⁶
故なく錢をだまされて持って行かれた。

中村：gama の a は男性母音、接辞 bu の u は中性母音、接辞 ha の a は男性母音。過去を表す接辞には ha, he, ho の三種がありますが、gama に女性母音の接辞 he や円唇母音の接辞 ho を付して gamabuhe, gamabuho とはせず、gamabuha と母音を調和させています。

吉池：なお、jiha be（錢を）の接辞 be の e は女性母音です。満洲語の対格（～を）の接辞には be しかないので、jiha の母音 a と調和させることはできません。しかし満洲語と関係が深い明代女真語には対格を表す接辞に ba, be, bo の三種があり母音を調和させることができます⁸。有圈点新満文の母音調和のグループ分けには諸説があります。また少々問題もあるので後で議論しましょう。

なぜ母音調和は起こるのか

中村：先に挙げた亀井孝・河野六郎・千野栄一(1996)や斎藤純男(2015)に、どのように母音

ない。」と述べ、これを単なる舌の調和と見る事に難色を示している。」「この実験結果から【音響音声学的に分析した結果：対談者注記】、私は母音調和をなす /ä/ /ü/ /ö/ の系列と /a/ /u/ /o/ の系列は、R. Jakobson 氏の言う、いわゆる vertical harmony（調音的には前舌対奥舌の対立）でもなければ、horizontal harmony（調音的には開口度の大小の対立）でもなく、強いて言えば P. Kiparsky 氏の言う所の diagonal harmony をなすと見るべきであろうとの結論に達した。」54 頁。なお、文中の vertical と horizontal は () の説明と合わない。逆であろう。

⁶ 舞格著、程明遠校『滿漢字清文啓蒙』（1730年序）の第三卷「清文助語虚字」の例による。

⁷ 津曲敏郎(2002)『満洲語入門 20 講』大学書林。

⁸ 吉池孝一(2020)「女真語と女真文字」『女真語と女真文字 付碑文拓本 10 種画像(JPEG)』（吉池孝一・中村雅之・長田礼子編著）古代文字資料館、4-16 頁参照。もと、『金・女真の歴史とユーラシア東方』勉誠出版、2019 年所収。

調和が起こるかは書かれていますが、なぜ起こるのかということは書かれていないようです。

吉池：その点について柴田武(1976)⁹によると、「「母音調和」という名称の意味は、母音を同類のものにそろえる（「同類化」）ということである。」「音韻論で同化とは、ある一つの音が他の音に引かれて同じになることである。したがって、母音調和における同類化は音韻論でいう同化に基盤がある。ただ、同化は、ある音が他の音と同一になることであるのに対して、母音調和の場合は、同一になることも含む同類化が行なわれるのである。」(26 頁)とあります。

中村：音の同化であるならば、生理的な無意識な音変化なので、“なぜ”という問いは不要ですが、同類化というと話し手の意図が働いているように受け取れる表現ですね。

吉池：柴田武(1976)は現代トルコ語の例に依って「形態素のつなぎ目の前後の母音が同類化することは何のために必要なのか。それは、形態素間の結びつきを固くするのに役立つからだと思う。二つの形態素を一つにまとめるのが母音調和の機能の一つである。」(30 頁)とし、単語などをまとめる働きとしてアクセントと母音調和を論じます。

中村：母音調和には、アクセントとともに、単語や、単語+接辞という音のまとまりを示す働きがある。別の言い方をすると、単語などのまとまりを示すために母音調和を利用したということですね。

吉池：もしも単語などのまとまりを示すために母音の調和を利用したと認めて良いならば、同じ働きを担うアクセントなどが発達した場合、それが母音調和を衰退させる契機となるかもしれませんね。母音の合流も母音調和を衰退させるのでしょうが、単語などをまとめる機能の発達と母音調和の衰退との関係もおもしろい問題であるかもしれません。

中村：多くの言語に見られるアクセント（高低アクセント、強弱アクセント、漢語方言の連読変調など）も、ヨーロッパ諸言語における名詞と形容詞の性・数・格の一致も、すべて意味の切れ目を明確にするために存在しているということを橋本萬太郎氏が述べています¹⁰。母音調和も同様の性格を帯びているということですね。母音調和の衰退とアクセントの関係は興味深いテーマです。

⁹ 柴田武(1976)「母音調和について」『月刊言語 6 特集・母音調和をさぐる』大修館書店、26-32 頁。

¹⁰ 橋本萬太郎(1981)「第 3 章 一致と母音調和とアクセント」『現代博言学』大修館書店。

吉池：有圈点満文の母音調和について、グループ分けの仕方が諸書にでていますので、次にそれを確認しましょう。

有圈点満文の母音調和諸説

吉池：目についた三つの説を紹介します。男性母音（陽性母音） \bar{u} は文字 \bar{u} のメレンドルフ式のローマ字翻字です。

河内良弘(1996)『満洲語文語文典』¹¹によると次のとおりですが、注記において、文字 \bar{u} と文字 \bar{u} を、音韻としては同一の音素 u とし一つの字母を用いても表記できるとします¹²。母音調和には文字の観点¹³から整理したものと、その他に音韻の観点¹⁴から整理したものがあり得ますが、下に提示したものは文字の観点から整理したものです。それ以外に注 12

¹¹ 河内良弘(1996)『満洲語文語文典』京都大学学術出版会、助編者：清瀬義三郎則府、愛新覚羅・烏拉熙春。助編者は、署名入りの注記で考えを述べる。

¹² 「現代黒龍江方言と伊犁方言中、陽性母音と結合する k, g, h の後の \bar{u} (\bar{u}) は、一律に満洲語第五母音【 \bar{u} と翻字される母音：対談者注】音価に接近した $[\bar{u}]$ となる。……省略……。

事実上、 \bar{u} (\bar{u}) の職能は、ただ k, g, h 三子音と結合するときのみ有意義だと言えよう。そして、k, g, h は満洲語では陽性と陰性の区別がある。 \bar{u} は陽性の音で、このため陽性の \bar{u} , \bar{u} , \bar{u} とだけ結合する。 \bar{u} と音素的には同一で、ただ陰陽の属性のみ異なる（すなわち陰性の \bar{u} (\bar{u}) は、陰性の \bar{u} , \bar{u} , \bar{u} とだけ結合する。このため、 $[\bar{u}]$ と $[\bar{u}]$ には、接続する子音の違いによって、二つの書写形式がある。 \bar{u} $[\bar{u}]$ は陽性子音との結合に用いられ、 \bar{u} $[\bar{u}]$ は陰性子音との結合に用いられる。この種の場合における \bar{u} $[\bar{u}]$ と \bar{u} $[\bar{u}]$ とは、ちょうど音韻論上と言う「相補分布」(complementary distribution) をなしている。そしてこの二つの音の差は極めて小さく、発音部位は非常に接近している。だから $[\bar{u}]$ と $[\bar{u}]$ とは同一音素の二つの変異音 (allophonic variant) なのである。つまり \bar{u} と \bar{u} の表示する音韻的な価値は全く相等しい。本来一つの字母を用いても表示できるものである。」(12 頁。助編者愛新覚羅・烏拉熙春氏による注記)

¹³ 城生伯太郎(1976)「モンゴル語の母音調和」『月刊言語6 特集・母音調和をさぐる』大修館書店、53-61 頁には「現在、モンゴルで出版されているモンゴル語文典の類を見ると、母音調和の説明はほぼ表 4 に見られるような形でなされているのが一般である。今、細かい問題は一切省いて核心のみ述べると、音韻面では中性として扱われていた /i/ が、文字面では第二音綴り以下の長母音に限り、形態文字素論的に男性文字 <ы> と女性文字 <ий> の対立を有する点に注目する必要がある。例えば表 1 の 11、44、77 をそれぞれ対格に格変化させると、<хамрыг>、<гэдэсийг>、<бичгийг> となり、<ыг> と <ийг> は男女の示差的特徴をなして対立することとなる。このような事実より文字には音韻とは異なる体系が存在することが明らかであり、これを音声との対応を考慮して図示すれば図 3 のようにまとめることができる。」(58 頁) とあり音韻と文字の相違に言及する。もっとも現代語であるならば文字と音の対応は直接確認することができるけれども、満洲文字で書かれた満洲語などの過去の言語の場合、直接に確認することはできず種々の資料により推察することになる。そこに解釈の相違が生じる場合がある。

¹⁴ 音韻は、一般には音の相補分布 (補い合う分布) や音体系への考慮などにより、合理的な解釈として音の単位を定めたものを指す。わたし (吉池) は、そのようにして定められた音の単位 (音素など) が、話し手と聞き手の言語習慣 (音の区別・同一の認識) を反映していると仮定し得る場合のみ有効であると考え。

のように音韻の観点から整理したものにも言及します。

陽性母音 a, o, ū

陰性母音 e, (u)

中性母音 i, u

津曲敏郎(2002)『満洲語入門 20 講』によると下のとおりです。なお津曲敏郎(2002)は有力な説として文字 u と文字 ū を同一の音素/u/とする説を紹介します¹⁵。入門書という立場のためでしょうか津曲氏がどのような考えをお持ちか明らかにしませんが、有力な説として 5 母音説を紹介するからにはそれを支持していると想定していいのかもしれませんが。そうであるならば下記は文字の観点からの母音調和であり、その他に音韻の観点からの母音調和があるということになります。

男性母音 a, o, (k, g, h のあとの) ū

女性母音 e

中性母音 i, u

中村：文字の観点からの母音調和を主として提示しつつ、その他に音韻の観点からの母音調和にも言及する。そして両者に異なりがあるとすると、入門する者にとってはややこしい話ですね。

吉池：その点については後に検討しましょう。次に挙げる早田輝洋(2011)¹⁶は論文なので、音韻論的な解釈によったものです。

男性母音 a, o

女性母音 e

中性母音 i, u

中村：河内良弘(1996)・津曲敏郎(2002)と、早田輝洋(2011)とではだいぶ異なるように見えますね。

吉池：だいぶ異なるように見えますが、音韻論的な解釈は同じようです。

¹⁵ 「なお kŭ, gŭ, hŭ と ku, gu, hu との音韻論的差異について、これを子音の違いを反映するものとみて、 ū (ならびに a, o) に続く k, g, h を軟口蓋後部もしくは口蓋垂音/q, c, h/とし、いっぽう u (および e, i) に続く k, g, h を軟口蓋前部音/k, g, x/とする解釈が有力である。つまり文字と音素(英 phonem: 区別すべき音の種類, / /に入れて表わす)の関係は次のようになる。

kŭ, gŭ, hŭ /qu, gu, hu/

ku, gu, hu /ku, gu, xu/」(10 頁)

¹⁶ 早田輝洋(2011)「満洲語と満洲文字」『言語教育フォーラム第 24 号 言語の研究Ⅱ—ユーラシア諸言語からの視座—』大東文化大学語学教育研究所、1-35 頁。

中村：河内良弘(1996)も津曲敏郎(2002)も母音調和の制限は「くずれて」おり「ゆるやか」とします¹⁷。どのようにくずれており、ゆるやかなのか、三つの説にそって確認をしましょう。

吉池：まず河内良弘(1996)を中心として津曲敏郎(2002)と比較しながら両者の相違を確認し、次いで早田輝洋(2011)を確認するという手順を進めましょう。

河内良弘(1996)

吉池：河内良弘(1996)には助編者清瀬氏による下記の注があります。先ず陽性母音(=男性母音)・中性母音・陰性母音(=女性母音)を表示して、

陽性母音 a, o, ū

陰性母音 e, (u)

中性母音 i, u

次いで次のように注記します。

上の表のうち、i と u は中性母音であって、母音調和の規則に支配されず、いずれの語にも自由に現われることができる。しかし、k, g, h に続く u だけは陰性母音となる。ただし満洲語の母音調和はかなり歴史的にくずれていて、複合語や接尾語・語尾のあるもの(例えば対格の-be など)はこの規則の外にあり、むしろ陽性母音と陰性母音は一語中に共存することが少ないとでも言うておく方が適切かも知れない。また k^h, g^h, h^h 以外の ū (多く外来語中に) や、eo の母音連続もこの規則の外にある。[清瀬義三郎則府] (15-16 頁)

中村：「k^h, g^h, h^h 以外の ū (多く外来語中に) や、eo の母音連続もこの規則の外にある。」とあるところの k^h, g^h, h^h の子音 k, g, h は、男性語に使用する子音字 ^hk, ^hg, ^hh ですから、ū はこの子音の後でのみ男性母音として機能し、それ以外は母音調和の規則の外にあるとのことですね。そうするとこれは、津曲敏郎(2002)の「(k, g, h のあとの) ū」と同様です。注記をするかしないかの違いです。

河内良弘(1996)の ū

吉池：^hk, ^hg, ^hh の後の ū には多くの使用例があり、この用法が通常の在り方のよう

¹⁷ 「満洲語の母音調和はかなり歴史的にくずれていて、複合語や接尾語・語尾のあるもの(例えば対格の-be など)はこの規則の外にあり、むしろ陽性母音と陰性母音は一語中に共存することが少ないとでも言うておく方が適切かも知れない。」(河内良弘(1996)、15 頁)。「満洲語の場合、その【母音調和の：対談者注】制限はゆるやかで例外がきわめて多い」(津曲敏郎(2002)、11-12 頁)

にみえます。それ以外に使用される \bar{u} は少数で、河内良弘(1996)には次のような語例がみえます。

女性語：ᠤᠯᠡᠨ \bar{u} len 家、ᠤᠷᠡᠨ \bar{u} ren 像、ᠲᠦᠮᠪᠢ \bar{u} tūmbi 打つ、ᠮᠠᠩᠭᠦ \bar{u} mānggu 燕の巢、
ᠲᠦᠬᠤ \bar{u} tūku からざお、ᠰᠦᠷᠭᠡᠬᠤ \bar{u} šūrgeku 糸まき
男性語：ᠰᠤᠨᠠ \bar{u} sāna 犬をひく皮ひも
不明：ᠴᠦᠨᠮᠣᠣ \bar{u} cūn moo 椿木

池上二郎(1946)¹⁸は \bar{u} を含む単語のうち、 \bar{u} len、 \bar{u} ren、 \bar{u} tūmbi、 \bar{u} sāna、 \bar{u} let (つぼ)、 \bar{u} let (蒙古の部族名) を外来語とします。なお \bar{u} cūn moo 椿木は漢語からの借用語です。

中村：最後の例は明らかに外来語ですが、漢語からの借用というよりはモンゴル語からの間接的な借用のような気がします。「木」は「mu」ですが、それを「moo」とするのは、漢語からの直接借用では考えづらいですね。元代のウイグル式モンゴル文字によるモンゴル語碑文に見られる漢語語彙では、都「tu」や路「lu」を「duu」「luu」とつづる例が多く見られます。これはポッペ式の転写なので、満洲語と見立てて転写すれば「doo」「loo」になります。つまり、「椿木」における「moo」もモンゴル語の「muu」をそのまま取り入れたと考えれば違和感は解消されます。そうであるならば、「 \bar{u} cūn moo」全体がモンゴル語経由の借用語ということになるのでしょうか。

吉池：「 \bar{k} u, \bar{g} u, \bar{h} u 以外の \bar{u} 」の多くが外来語由来と考えて矛盾はないということですね。

中村：上記のような女性語に使用される少数の \bar{u} が母音調和の規則の外にある例外であるならば、津曲敏郎(2002)のような「k, g, h のあと」との注記は親切ではありますが、「k, g, h のあと」という一部において \bar{u} がでると誤解を与えるかもしれませんね。

なお、用語ですが、男性語に現われる ᠮ k, ᠮ g, ᠮ h などを男性子音字、女性語に現われる ᠯ k, ᠯ g, ᠯ h などを女性子音字と呼び混乱を避けましょう。

吉池：注記は無くても良いかもしれませんね。なお \bar{u} が男性子音字 k, g, h 以外の子音のあとにでる場合、文字表では下記のように () を付して (\bar{u}) とするならばわかりやすいかもしれません。

男性子音字 ᠮ t, ᠮ d	+	a, i, o	
女性子音字 ᠯ t, ᠯ d	+	e, u, \bar{u}	→ e, u, (\bar{u})

¹⁸ 池上二郎(1946)「満洲語の若干の文語形中の \bar{u} の表す母音に就いて」*Tōyōgo Kenkyū*. 『満洲語研究』汲古書院所収、206-212 頁。

中村：これらは比較的比較的に小さな問題です。しかし、中性母音の u に丸括弧を付し (u) として女性母音にも配するか、あるいは配さないか、これは小さな問題ではありません。河内良弘(1996)は (u) を女性母音にも配しますが、津曲敏郎(2002)は女性母音には配しません。

河内良弘(1996)と津曲敏郎(2002)の u

吉池：河内良弘(1996)には、さきに引用したように「i と u は中性母音であって、母音調和の規則に支配されず、いずれの語にも自由に現われることができる。しかし、k, g, h に続く u だけは陰性母音となる。」とあります。

中村：津曲敏郎(2002)は女性母音に u を含めません。事実として起こっていることは同じでも、解釈が異なるのでしょう。おそらく津曲敏郎(2002)は、女性子音字 $^{\text{f}}$ k, $^{\text{f}}$ g, $^{\text{f}}$ h の後の u も、それ以外の u と同様に、中性母音と見なすのでしょう。中性母音は母音調和の規則に支配されないので女性子音字の後の u を中性母音と理解しても理屈の上では不都合はありません。

吉池：先ほどの男性子音字の後の \bar{u} と、今問題にしている女性子音字の後の u の振る舞いには似かよったところがありますが、次のように質が異なります。

\bar{u}	男性子音字 $^{\text{f}}$ k, $^{\text{f}}$ g, $^{\text{f}}$ h の後	それ以外
	常用	> 例外
u	女性子音字 $^{\text{f}}$ k, $^{\text{f}}$ g, $^{\text{f}}$ h の後	それ以外
	常用	= 常用

中村：上の分布を見ると、男性子音字の後の \bar{u} を男性母音とし、u を中性母音とする論も可能ですが、やや冗漫というかスマートではありません。この二種がほぼ相補分布をなすことから、音韻論的な解釈を施す余地は十分にありますね。

中性母音の i と u の相違

吉池：河内良弘(1996)のように、女性子音字 $^{\text{f}}$ k, $^{\text{f}}$ g, $^{\text{f}}$ h の後の u を女性母音、それ以外の u を中性母音として両者を区別する解釈にしたがったばあい、中性母音の i も、u と同様の扱いをして良いのではないか、ということになりそうですが。

u	女性子音字 $^{\text{f}}$ k, $^{\text{f}}$ g, $^{\text{f}}$ h の後	それ以外 ($^{\text{f}}$ k, $^{\text{f}}$ g, $^{\text{f}}$ h を除く) の後
	常用	= 常用
i	女性子音字 $^{\text{f}}$ k, $^{\text{f}}$ g, $^{\text{f}}$ h の後	それ以外 ($^{\text{f}}$ k, $^{\text{f}}$ g, $^{\text{f}}$ h を除く) の後
	常用	= 常用

中村：たしかにこれをだけをみると、女性子音字 $^{\text{f}}$ k, $^{\text{f}}$ g, $^{\text{f}}$ h の後の i と u の出かたと、

それ以外の i と u の出かたは似ています。河内良弘(1996)の u の解釈を適用すると、女性子音字 $^{\text{f}}k$, $^{\text{f}}g$, $^{\text{f}}h$ の後の i は女性母音で、それ以外の i は中性母音としても良いことになります。しかし、次のように、男性子音字と女性子音字とのつながり方は、u と i とでは異なるので、その点をどのように理解するかということです。

子音	母音
男性子音字 $^{\text{m}}k$, $^{\text{m}}g$, $^{\text{m}}h$	+ a, o, ū
女性子音字 $^{\text{f}}k$, $^{\text{f}}g$, $^{\text{f}}h$	+ e, i, u
男性子音字 $^{\text{m}}t$, $^{\text{m}}d$	+ a, i, o
女性子音字 $^{\text{f}}t$, $^{\text{f}}d$	+ e, u, (ū)

吉池：母音 i の方は、男性子音字 $^{\text{m}}t$, $^{\text{m}}d$ と女性子音字 $^{\text{f}}k$, $^{\text{f}}g$, $^{\text{f}}h$ のそれぞれの後にできるので、いずれに列することもできず中性母音とするのが穏当のように見えます。それに対して、母音 u は二種の女性子音字 $^{\text{f}}k$, $^{\text{f}}g$, $^{\text{f}}h$ と $^{\text{f}}t$, $^{\text{f}}d$ の後にでて、女性母音としての振る舞いが目につきます。そこで、もしも女性子音字 $^{\text{f}}k$, $^{\text{f}}g$, $^{\text{f}}h$ のあとの母音 u を女性母音とするならば、女性子音字 $^{\text{f}}t$, $^{\text{f}}d$ のあとの母音 u も女性母音としなければ理屈に合わないということになりませんか。そうすると込み入ったことになりますね。

中村：母音 u は中性母音として女性子音字 $^{\text{f}}k$, $^{\text{f}}g$, $^{\text{f}}h$ および女性子音字 $^{\text{f}}t$, $^{\text{f}}d$ のあとに出現するとしたほうが複雑にならないのではないのでしょうか。

早田輝洋(2011)について

中村：河内良弘(1996)と津曲敏郎(2002)の母音調和は文字上の区別。早田輝洋(2011)は音韻的に解釈。前二者と後者は、一見するとだいぶ異なるようであるが、根本は同じようだったことでした。早田輝洋(2011)にはどのような説明があるのでしょうか。

吉池：早田輝洋(2011)は「満洲語の母音音素は i e a o u の 5 個であるが、有圈点文字は音素 /u/ に文字 u{u} と ü{ü} 【文字 u と ü は早田氏のローマ字で、{} はメレンドルフ式のローマ字：対談者注】の二つが用いられている。5 個の音素のうち /e/ が女性母音、/a/ と /o/ が男性母音である。/i/ と /u/ は男性語・女性語の両方に用いられている。」(12 頁) とします。

中村：満洲語の母音音素を 5 とする根拠は何でしょう。

吉池：その点については早田輝洋(2011)には詳しい説明は無く、早田輝洋(2003)¹⁹に有り

¹⁹ 早田輝洋(2003)「満洲語の母音体系」『九州大学言語学論集』(九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室編) 第 23 号、1-10 頁。

ます。早田輝洋(2003)は、先ず下記の表を示し「これは典型的な相補分布であり、6個の母音音素を認めれば子音KとQは同一音素の異音と見えるであろう。」(2頁)とします。

この表は横に早田氏が設定する6母音の音声表記 [i, e, u, ɯ, ɔ, a] を配し、縦に子音K (前部軟口蓋音 [k, g, x] を代表させたもの)、Q (後部軟口蓋音 [q, ɠ, χ] を代表させたもの) を配したものです。【】は対談者が補ったものです。

【メレンドルフ式】		【i】	【e】	【u】	【ū】	【o】	【a】
【6母音の音声】		i	e	u	ɯ	ɔ	a
【前部軟口蓋音】	K	Ki	Ke	Ku	-	-	-
【後部軟口蓋音】	Q				Qu	Qɔ	Qa

中村：二種の子音を相補分布により一種の音素と解釈するのは通常音韻論の在り方です。「6個の母音音素を認めれば」とありますが、6個の母音音素を認めない立場もあるということですね。

吉池：早田輝洋(2003)は、K Q 以外の子音を追加した次の表を示し「ここでK Q 以外の子音から考えれば、母音音素は5個であり、u と ɯ は同一音素の異音、即ち、/Ku/= [Ku], /Qu/= [Qu] という解釈の余地が出てくる。この場合、子音に k と Q の対立を認めることになる。」(2頁)とします。

【メレンドルフ式】		【i】	【e】	【u】	【ū】	【o】	【a】
【6母音の音声】		i	e	u	ɯ	ɔ	a
【前部軟口蓋音】	K	Ki	Ke	Ku	-	-	-
【後部軟口蓋音】	Q				Qu	Qɔ	Qa
	b	bi	be	bu	-	bɔ	ba
	c	ci	ce	cu	-	cɔ	ca
	m	mi	me	mu	-	mɔ	ma
	l	li	le	lu	-	lɔ	la
	.						
	.						

中村：この音節の分布をみると、Qu (メレンドルフ式の kū, gū, hū に相当) だけが孤立しています。先の議論において ū は、男性子音字 ^hk, ^hg, ^hh の後にでて、それ以外の子音の後にでるものは外来語由来など少数であり例外と見なしてもよいということを確認しました。

次の表のように、上の早田輝洋(2003)の表から【ū】 [ɯ] を削除し、音声 [K] と [Q] を

音素/k/と/q/とし、音声 [u] と [o] を音素/u/の異音と解釈するならば、体系としてはスッキリしたものとなりますね。

【メレンドルフ式】		【i】	【e】	【u~ū】	【o】	【a】
【5母音】		/i/	/e/	/u/	/o/	/a/
【前部軟口蓋音】	/k/	[Ki]	[Ke]	[Ku]	-	-
【後部軟口蓋音】	/q/			[Qu]	[Qo]	[Qa]

吉池：早田輝洋(2003)は、6母音1系列子音であるか、それとも5母音2系列子音であるか、ということが問題になるとし、二つの可能性に言及しつつも、5母音2系列子音を妥当なものとしています。

5母音2系列子音の論拠

中村：早田輝洋(2003)は、体系のなかで孤立したQuの問題は5母音2系列子音とすると解決することができるとしたわけですが、5母音2系列子音を妥当とする論拠はそれだけでしょうか。

吉池：満洲人は2系列の子音のあることを認識していたということを論拠とします。満洲人は有圈点満洲文字の作成に際して、「男性子音字 ᠮ k, ᠮ g, ᠮ h+母音 a, o, ū」と「女性子音字 ᠯ k, ᠯ g, ᠯ h+母音 e, i, u」のほかに、漢語の前部軟口蓋音の表記のために「ᠮ k, ᠮ g, ᠮ h+母音 a, o」を作り、ᠮ ga等と、ᠯ ga等を対立させました。このような文字表記を作った事実により、男性子音字 ᠮ k, ᠮ g, ᠮ hで表記する音と、女性子音字 ᠯ k, ᠯ g, ᠯ hや中国語用 ᠮ k, ᠮ g, ᠮ hで表記する音を、後部軟口蓋音と前部軟口蓋音として音韻的に区別していたとします²⁰。

²⁰ 「もし [k g x] と [q g χ] とが同じ音素/k g x/に属するものならば (6母音体系)、漢語音 [ga] を写すのに何故/ga/ (文字 ga) 【メレンドルフ式の ga: 対談者注】とせず、/g/の文字に区別符をつけてg'【メレンドルフ式の g': 対談者注】という文字を作りましてg'aと書いたのか? [g] と [g'] が同じ音素/g/に属するのならば、漢語音の [ga] は通常の満洲語にある [ga] とは音声が多少違うものの、gaと書くのが普通ではないか? [g] と [g'] に音韻論的対立がなければ、[ga] の音と [ga] の音は区別できず、漢語 [ga] を gaと書き [ga] と読んでも違いが分からないのが普通であろう。[ga] と [ga] の区別が出来ないということは、現代日本語話者が通常 [ga] と [ga] の区別が出来ないことや [ɾa] [la] の区別が出来ないことと同じである。それを満洲人は、わざわざ [ga] ではなくて [ga] であるとして、漢語でさえ音韻的な区別のない [ga] と [ga] を区別し、前者はg'a, 後者はgaという文字で書き分けたのは、当時の満洲語が一般に [ga] と [ga] の区別を持っていた証拠ではなかろうか。」(4頁)。

中村：男性子音字 ᠠ k, ᠢ g, ᠨ h と、女性子音字 ᠰ k, ᠳ g, ᠬ h 及び漢語表記用の ᠰ k, ᠳ g, ᠨ h と異なる音であったことは、満洲文字の伝統的な音節表である十二字頭の各字頭内の音の配列順にも反映していることを「満洲文字の文字表をめぐって(2)」で指摘しましたね²¹。

吉池：早田輝洋(2003)は、満洲人が後部軟口蓋音と前部軟口蓋音を音韻として区別していたならば、5 母音 2 系列子音であったに違いないとします。その 5 母音を母音調和のグループに分けると、男性母音が a, o、女性母音が e、中性母音が i, u ということになります。

中村：男性子音字 ᠠ k, ᠢ g, ᠨ h のあとにでる ᠠ も、女性子音字 ᠰ k, ᠳ g, ᠬ h のあとにでる u も中性母音/u/ということですね。 ᠠ ᠠ は、 ᠠ u とはだいぶ字形が異なりますが、 ᠠ ᠠ がどのような経緯で男性子音字 ᠠ k, ᠢ g, ᠨ h のあとに使用されたのか問題となります。

ᠠ は ᠠ u の代用

吉池：早田輝洋(2003)は、 ᠠ k に母音 u を付して ku を表記する場合、点のある ᠠ u を使用すると、ku ではなく ᠠ go になってしまう。そこで、一画の線を左に付した ᠠ を、点のある ᠠ u の代用として、 ᠠ としたと説明します²²。

中村：巧妙な説明です。満洲人は同じ音素/u/を異なる文字 u と文字 ᠠ で表記したに過ぎないということですね。

私は早田氏の解釈に賛成ですが、文字を利用して母音調和を表示すると音韻解釈がうま

²¹ 第一字頭の中にある音節をみると問題の子音は次のような配列となる。a, o, ᠠ の上の k 等と、e, i, u の上の k 等に下線(単線)を付します。外国借音(中国語)用の文字にも下線(波線)を付します。

……………, ka, ga, ha, ko, go, ho, k ᠠ , g ᠠ , h ᠠ , ……………, ke, ge, he, ki, gi, hi, ku, gu, hu, k ᠰ , g ᠳ ,

h ᠨ , k ᠰ , g ᠳ , h ᠨ , ……………

下線を引いた a, o, ᠠ の上の男性子音字 k 等と、e, i, u の上の女性子音字 k 等が離れて置かれているが、e, i, u の上の女性子音字 k 等と外国借音用の文字 kᠠ , gᠠ , hᠠ , kᠰ , gᠳ , hᠨ が一緒に置かれている。e, i, u の上の k 等と外国借音の k 等の子音は同類の音であったため隣に置いたが、a, o, ᠠ の上の k 等の子音の音とは異なっていたため、離して置いたと理解することができる。このように g, k, h など、喉音の調音方法の相違を、音節の配列順に反映させることは漢語の韻書の韻字の配列にもみられるもので奇異なことではない。

²² 「満洲文字 u と ᠠ が同じ音素/u/を表すのなら、何故、例えば/qu/を qu の文字で表さず、わざわざ ᠠ のような特殊な文字を、共時的にはあるが、用いたのであろうか? 単独で /u/を/o/と区別して表すときには、文字 o に点を附すということが行われる。しかし文字列 qo に点を附すと/go/になってしまう。それ故、/qu/を表すためには文字 o に点を附さず一画を付け加えた形の文字 ᠠ を用いざるを得なかった。即ち、文字 ᠠ は音素としての独立性がある故に u と区別した文字になっているというわけではない。」(6-7 頁)。

く反映されません。その点を工夫したいものです。

母音調和表記の提案

吉池：河内良弘(1996)や津曲敏郎(2002)は \bar{u} を男性母音に配します。この \bar{u} を中性母音に移して $u(\bar{u})$ と表示する方法はあります。

男性母音 a, o

女性母音 e

中性母音 i, $u(\bar{u})$

中村：河内良弘(1996)や津曲敏郎(2002)には、文字の観点(実用的な面を備えている)からの母音調和の表記と、音韻論の観点からの母音調和の解説とが混在しており、入門者にとっては混乱するところです。上の案ですと5母音と6文字を、それぞれ調和することになり、穏当なところかもしれません。ところで吉池さんは別の考えをもっていないでしたか。

音素/ \bar{u} /の存否

吉池：5母音2系列子音に立ち「中性母音 i, $u(\bar{u})$ 」とすることに異義はありません。しかし6母音2系列子音であった可能性も残しておきたいとおもうのです。

中村：音韻論的にも男性母音 a, o, \bar{u} 、女性母音 e、中性母音 i, u の6母音であったということですね。

吉池：2系列の子音を認め、さらに6母音として音素/ \bar{u} /を認めると、音韻体系としてみればあい、余分な対立を認める均衡のとれないものとなります。しかし、満洲人が/u/と/ \bar{u} /の違いを認識していた可能性を捨てきれません。もし/u/と/ \bar{u} /の違いを認識していたならば、音素として6母音を認めてよいのではないのでしょうか。そうであるならば、文字の観点からの母音調和と音韻論の観点からの母音調和が一致します。

中村：満洲人が/u/と/ \bar{u} /の違いを認識していたとする根拠はなんでしょう。

吉池：根拠とまでは言えないかもしれませんが、『満漢字清文啓蒙』巻之一に掲載されている十二字頭の最初にある第一字頭をみると次のようになります。

「a, e, i, o, u, \bar{u} , na, ne, ni, no, nu, n \bar{u} ……」(メレンドルフ式のローマ字翻字による)

a, e, i, o, u, \bar{u} のように配置されており6母音の一つとして \bar{u} を扱っているようにみえます。また n \bar{u} , k \bar{u} , g \bar{u} , h \bar{u} b \bar{u} , p \bar{u} , s \bar{u} , š \bar{u} , l \bar{u} , m \bar{u} , c \bar{u} , j \bar{u} , y \bar{u} , r \bar{u} , f \bar{u} のようなでかたもします。男性子音字の k \bar{u} , g \bar{u} , h \bar{u} 以外の n \bar{u} , b \bar{u} などの音節は、実際にはほとんど使用されなかったもので、体裁をととのえるための表記でしょうが、独立した一つの母音として扱っているように見え

ます。少数であっても男性子音字 ᠎ k, ᠎ g, ᠎ h 以外において使用されていることも事実です。文字 ᠤ は文字 u の単なる代用ではないと考えたいのです。

中村：文字 ᠤ が男性子音字 ᠎ k, ᠎ g, ᠎ h の後で固定して使用され続ける間に、文字の力によって、次第に独立した母音として認識されるようになっていったということはあるかもしれません。この対談の中では、6 母音説は保留にしておきませんか。

吉池：これまでの議論で、母音については、ほぼ確認と検討が終わりました。最後に、文字表²³の母音部分の、子音と母音の組合せについての注記を確認しておきましょう。

子音と母音の組合せ

吉池：子音と母音の組合せについて、文字表より確認すべき箇所を取り出すと次のとおりです。母音の e と u はふつう右側に「、」を付すのですが、子音との組合せによっては「、」を付さない場合があります。どのような場合に「、」を付さないかということについては表中の注記で指示されます。

表 1. 文字表の母音の一部

翻字と発音	初頭の字形	中間の字形	末尾の字形	単独の字形
e [ə]	ᠡ	ᠡ	ᠡ	ᠡ
		t, d, k, g, h の下 ᠡ	t, d の下 ᠡ	b, p の下 ᠡ *
			k, g, h の下 ᠡ	
u [u]	ᠤ	ᠤ	単音節末尾 b, p の下 ᠤ *	ᠤ
		t, d, k, g, h の下 ᠤ	多音節末尾 ᠤ	
			t, d の下で単音節末尾 k, g, h の下 ᠤ	
			t, d の下で多音節末尾 ᠤ	

中村：表 1 では ᠠ a と ᠡ o は省略されており見比べることはできませんが、初頭においては ᠠ a と ᠡ e のように区別があります。中間と末尾においては e の右側に点「、」を付して a と区別します。u は初頭・中間・末尾において右側に点「、」を付して ᠡ o と区別します。このような点「、」の用法が有圈点新満文の発明です。これだけなら混乱はないのです

²³ 吉池孝一(2022)「満洲字の文字表」『KOTONOHA』第 235 号(2022 年 6 月)、1-7 頁。

が、子音の区別にも点「ゝ」が使用されます。子音の中間形は省略し、初頭形だけを下に提示しました。

- ①男性子音字 ḱ の右側に点「ゝ」を付して、 ḱ と ḡ を区別する。
- ②女性子音字 ḥ の右側に点「ゝ」を付して、 ḥ と ḡ を区別する。
- ③男性子音字 ṭ の右側に点「ゝ」を付して、 ṭ と ḏ を区別する。
- ④女性子音字 ṣ の右側に点「ゝ」を付して、 ṣ と ḏ を区別する。
- ⑤外国借音用子音字 ḱ の右側に点「ゝ」を付して、 ḱ と ḡ を区別する。

以上のうち、①③の男性子音字および⑤の外国借音用子音字は、母音字 e, u と結び付かないので、点「ゝ」は重ならず問題はおきません。②④の女性子音字は、母音字 e, u と結び付き、そうすると母音字 e, u の点「ゝ」と子音字の点「ゝ」が重なってしまうので、工夫をしなければなりません。どうするかというと、②④の女性子音字は ḥ a と ḥ o と結びつかないので、点「ゝ」のない ḥ a と ḥ o の字形をそのまま利用して下のようになります。中間の字形の例のみ示します。末尾の字形については省略しますが理屈は同じです。

- ・女性子音字 ḥ k+e は ḥ ke とし、 ḡ g+e は ḡ ge などとする。
- ・女性子音字 ṣ t+e は ṣ te とし、 ḏ d+e は ḏ de とする。
- ・女性子音字 ḥ k+u は ḥ とし、 ḡ g+u は ḡ などとする。
- ・女性子音字 ṣ t+u は ṣ tu とし、 ḏ d+u は ḏ du とする。

吉池：表 1 の e の中間の字形の「t, d, k, g, h の下 ḥ 」と、末尾の字形の「t, d の下 ḥ 」と「k, g, h の下 ḥ 」の注記は、女性子音字の t, d と k, g, h を指すもので、母音 e の右側の点は付さないということ指すということですね。

また、u の中間の字形の「t, d, k, g, h の下 ṣ 」と、末尾の字形の「t, d の下で単音節末尾 k, g, h の下 ṣ 」と「t, d の下で多音節末尾 ḏ 」の注記は、女性子音字の t, d と k, g, h を指すもので、母音 u の右側の点は付さないということ指すということですね。

中村：子音 k, g, h と t, d はともに男性子音と女性子音の区別を持っているわけですが、上で見たように、その母音結合の仕方はやや異なります。表で比較してみると以下の通りです。なお、今は k と t で代表させますが、男性子音を Q と T で、女性子音を K と t で示すことにします。

【メレンドルフ式】		【i】	【e】	【u】	【ū】	【o】	【a】
【前部軟口蓋音】	K	Ki	Ke	Ku	-	-	-
【後部軟口蓋音】	Q				Qū	Qo	Qa
【歯茎破裂音】	t	-	te	tu	-	-	-
【歯茎破裂音】	T	Ti	-	-	-	To	Ta

母音 i と結合するのが、k, g, h では女性子音であり、t, d では男性子音です。これは音声・音韻の問題ではなく、文字上の問題です。モンゴル文字の段階から、Ki と Ti は存在しており、有圈点新満文の段階で最低限の区別に必要な女性文字 t を -e, -u との結合においてのみ作成したということでしょう。これによって、「ゝ」を e, u の表記に使用する必要がなくなったというわけです。

吉池：今回で母音の問題について一区切りがつき、最後に子音文字の一部についても検討しました。次回は無圈点満文を利用して母音文字 ū と子音文字の諸問題について検討しましょう。